

1. 海洋環境変動調査

太田太郎

目的

本県沖合の魚群の回遊状況の推定、漁場形成の予測に必要な海洋環境の調査等を行う。

方法

試験船第一鳥取丸（199 トン）を使用して、本県沖合に設定した沿二-2 線（図 1）で 2, 8, 10 及び 12 月に、沖合-2 線（図 2）で 9 月と 11 月に海洋観測を実施した。稚沿岸二-2 線（図 3）で 4 月と 5 月に、稚沖合二-2 線（図 4）で 3 月と 6 月に海洋観測とノルパックネットを用いた水深 150m 深から（150m 以浅の場合は海底直上から）の鉛直曳きによる卵・稚仔の採集を行った。す-1 線（図 5）で 7 月に海洋観測とスルメイカ釣獲試験を行った。

海洋観測は CTD（COMPACT-CTD STD-1050, JFE アドバンテック社製）を使用し、全点で表面から 500m まで（500m 以浅の場合は海底直上まで）の水温・塩分を測定し、さらに水深 1, 000m を超える 1 点で 1, 000m まで測定した。ただし、表面水温は棒状水温計により計測した。塩分については、全点で表層をバケツ採水し、その試料を持ち帰り、サリノメータ（ギルドライン Autosal18400B）で検定した。

結果

定線観測は、天候の影響により、一部観測を実施できなかった定点があったが、概ね計画どおり実施した。

定線観測の代表点（観測点:36.00' N, 133.40' E）による表面から水深 100m 深までの月別水温変化を調べた。また、栽培漁業センターヒラメ親魚池の午前 9 時の水温を毎日計測した。定線観測の代表点による表面から水深 100m 深までの月別水温変化及び栽培漁業センターヒラメ親魚池での水温定置観測結果を図 6 及び図 7 に示した。

隠岐諸島周辺海域での本年の海況は以下のとおりであった。沿岸の表面水温は、夏季から秋季にかけては平年より高めで推移し、11 月以降は平年並みで推移した。50m 深水温は、4 から 9 月にかけては平年より高めで推移し、10 月以降、平年より低めに転じた。100m 深水温は、4 月から 9 月にか

けては平年より高めで推移し、10 月、11 月は平年より低めに転じたが 12 月は平年よりかなり高めとなった。

今年は島根沖冷水が周年に渡り隠岐西方に停滞していた。また、8~10 月にかけて隠岐東方に暖水塊が停滞したが、11 月以降、山陰若狭沖冷水の勢力が強まり、暖水塊の勢力も弱まった。

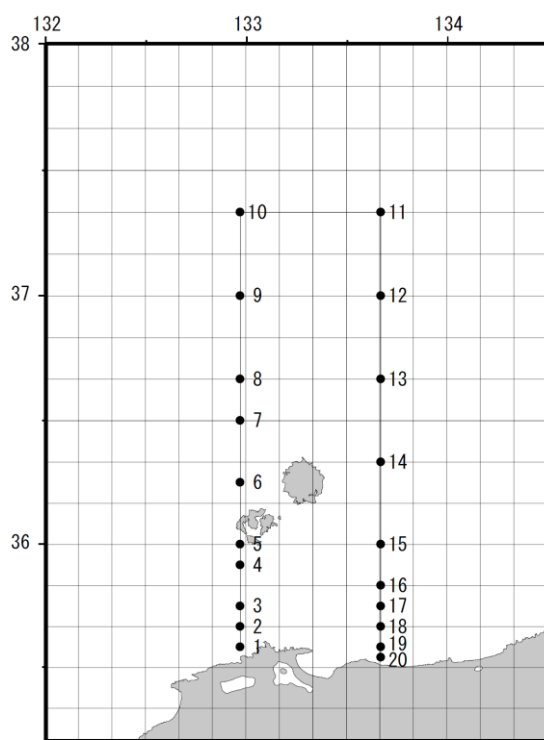


図1 沿岸観測定線（沿二-2）

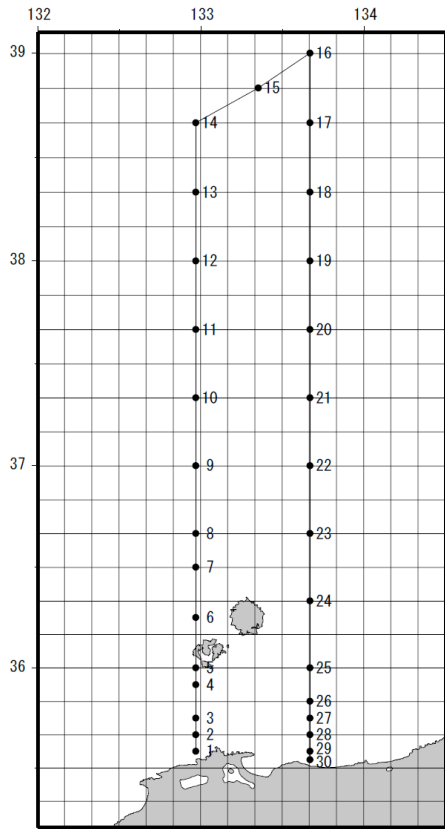


図2 沖合海洋観測線（沖合一2）

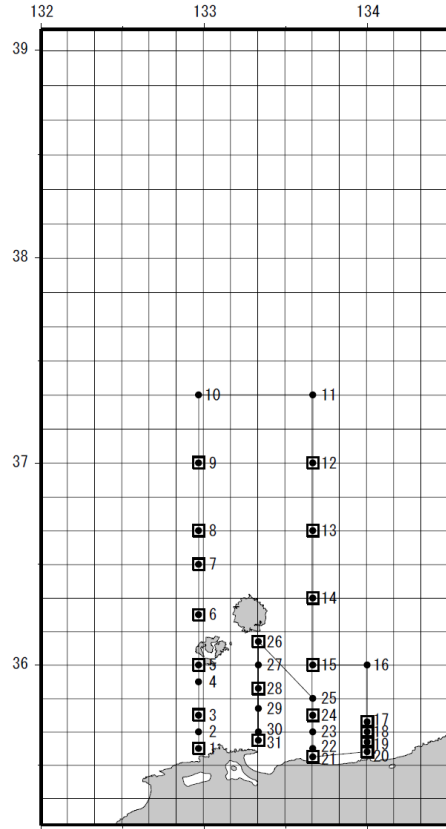


図3 沿岸稚魚調査定線（稚沿岸二一2）

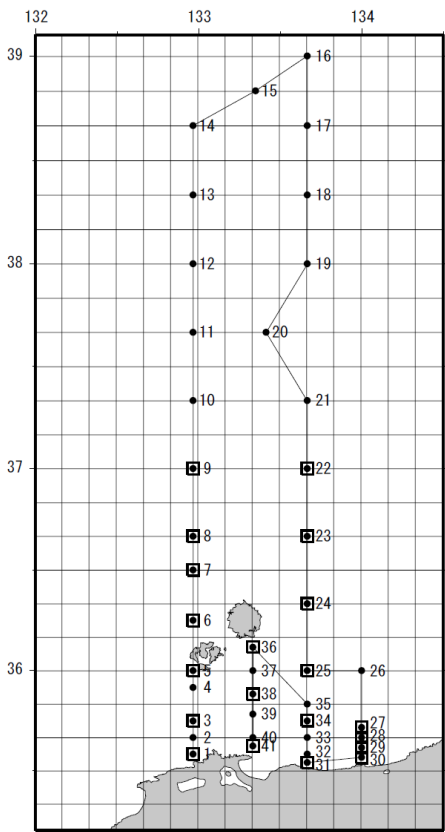


図4 沖合稚魚定線（稚沖合二一2）

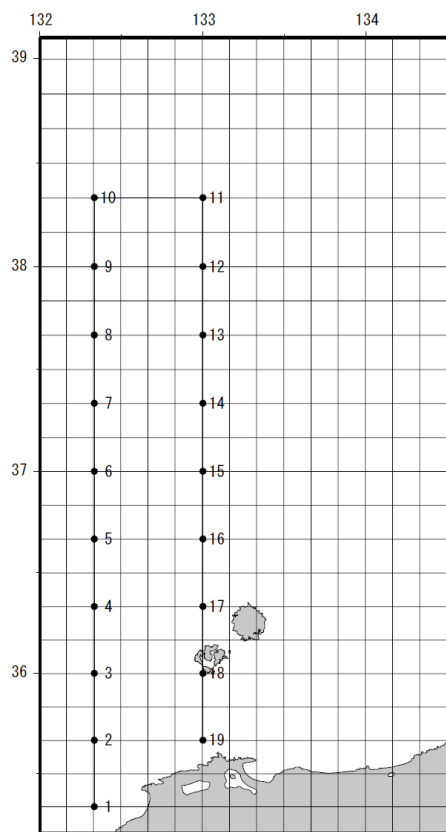


図5 スルメイカ漁場一斉調査定線（す一1）

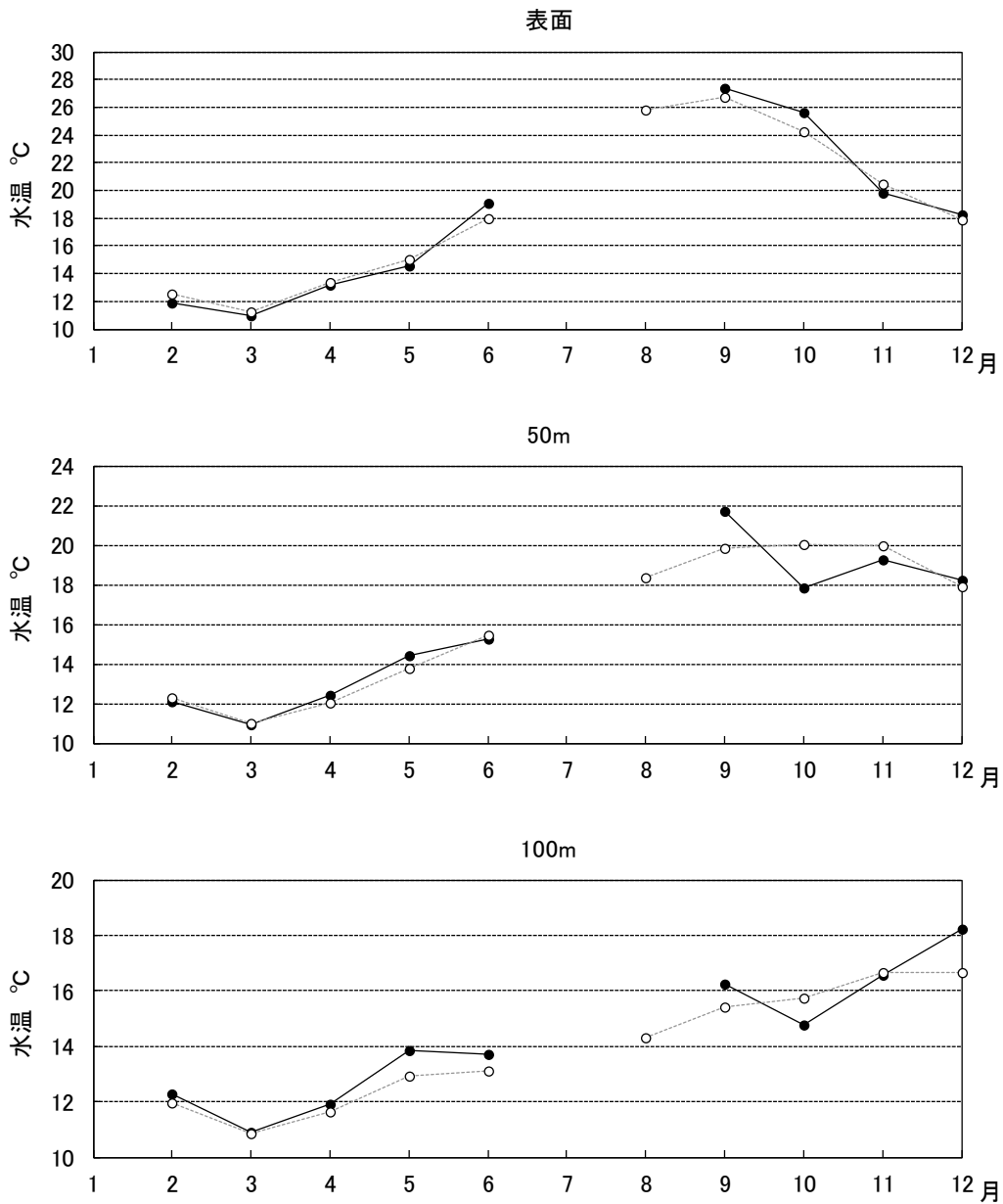


図6 定線観測による赤碕沖の月水温変化

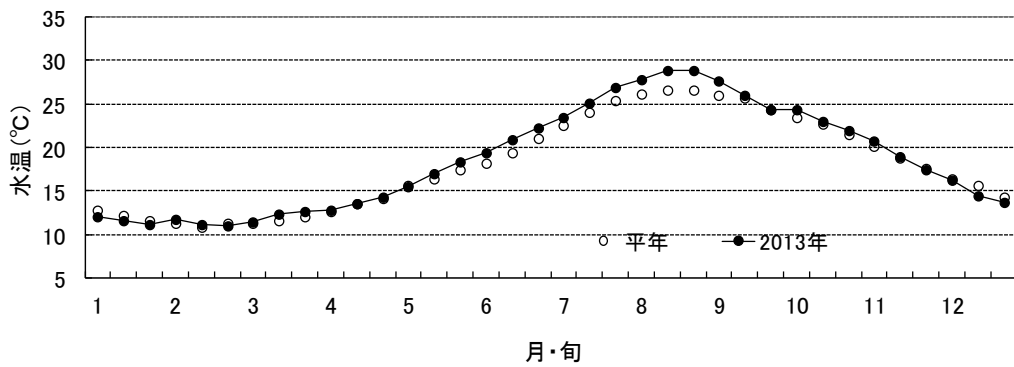


図7 栽培漁業センターヒラメ親魚池の旬平均水温の変化